

## 母校の思い出

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加美山, 浩信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/574">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/574</a>

# 母校の思い出

加美山 浩 信

## 1. はじめに

私は昭和57年に文学部英文学科に入学しました。昭和61年3月に卒業して民間就職をしたものの程なくして退職し、翌年、大学院に入りました。修士課程修了後、平成元年4月に宮城県の高校教諭となり、普通高校4校と支援学校1校経て、平成27年4月からは仙台市立仙台高等学校に勤務しております。東北学院大学という学びの場に身を置くことができたおかげで、学部入学から修士課程修了までの間、多くの先生方にお会いすることができました。振り返ってみると、若い頃のそうした出会いが今の私の基盤となっていることに気づきます。極めて個人的な内容になり甚だ恐縮ではありますが、昭和最後の7年間にお世話になった先生方の思い出を辿りながら、東北学院大学での経験と教員生活について記してみたいと思います。

## 2. 先生方の思い出と今の私

1年生の時の英会話の授業で、高校の時からそのお名前だけはたまたま存じあげていたキャロリン・ジョイ・ウィリアムズ先生に教えていただくと知った時は、不思議な縁を感じたものでした。ウィリアムズ先生にはその後、「アメリカ研究」でアーサイナス大学夏季留学プログラムに参加する際にもお世話になりました。2年生の英会話はバーバラ・メンセンディーク先生に、また3年生の英作文はジェームズ・ブラウン先生に、それぞれ指導していただきました。日本語が堪能なこうした先生方は、しかしながら、学生の前で日本語を使うことはまずほとんどありませんでしたので、先生方にこちらの考えや意見を伝えるのに必死で英語を使ったものでした。3人の先生方は、ス

モールステップ的なアプローチが共通していました。高校に入学したばかりの生徒は、高校英語と中学時代の授業の違いに苦手意識を持つことがあります。しかし、一見全く新しいことをやっているようでも、実は中学時代の既習事項の延長線上にあるのだと理解できれば、その苦手意識も徐々に克服されます。私は日頃からこのアプローチを用いて、目の前の生徒に合った発問を積み重ねることで中高間のギャップを埋め、彼らのもつ英語学習に対するネガティブな印象を払拭するように取り組んでいます。

Language is primarily speech. とはいうものの、個人的には高校までの段階で英語を実際に使う機会は全くありませんでした。入学後、ウィリアムズ先生と大学近くの喫茶店で、友人と一緒に昼食をとりながらとりとめのない話をしたのが、おそらく初めて授業以外で英語を使った機会でした。メンゼンディーク先生は米ヶ袋のご自宅に我々学生を招待して下さったことがあり、アメリカの家庭的なクリスマスの雰囲気を実際に体験することもできました。ネイティブの先生方に入学当初から継続して指導を受け、授業の内外を問わず親しく接することができたことは、当時は大変貴重な経験でした。こうした学習環境の中で、いわゆる四技能はもちろんのこと、英語やキリスト教の文化的な側面に関しても鍛えていただいたように思います。後年、高校の現場でAET、のちにALTと呼ばれる外国語指導助手と仕事をする上で彼らとごく自然に付き合うことができたり、教科書で文化的な事物が扱われた時に実感をもって説明できたりしたのは、東北学院におけるこのような経験があったからだと感じているところです。

入学後の所属は英文科5Gで、担任は川嶋順先生でした。先生には英語音声学の授業でお世話になりました。言語の音声面に興味があった私にとって、子音の分類基準と口腔断面図を使った調音方法の解説、母音四角形を使った母音の調音点の説明、等々は大変興味深いものがありました。そうした説明の後には、Maggie has an apple in her bag. のような例文を用いて実際に発音練習を繰り返し行い、英語らしい発音を身につけました。この例文では、ター

ゲット音の[æ]はもちろんのこと、文強勢、機能語の弱音化、所有格のhの脱落等にも注意しながら練習したことが懐かしく思い出されます。音声学の授業で学んだこうした知見や口腔断面図・母音四角形は、高校の授業の中で音声指導をする時にはいつも活用させていただいています。

川嶋先生は授業中、母音四角形を見ると日本語で「知らない」が「知らねー」、「だいこん」が「でえこん」等に変化するのは一定の音法則に基づいているということが理解できる、子音の発音は練習すれば上達も定着もしやすいが、母音は母語の影響が出やすいので実はこちらの方が上達も定着も難しい、現代英語で発音と綴りの間に乖離があるのは大母音推移が理由の一つだ、等々といった様々なお話をしてくださいました。日本語にはない[r]や[θ]といった子音よりも母音の方が難物なのだといったお話は、理論と実践を両輪とした授業を受けていると実に納得しやすいものでした。川嶋先生の授業は、今学んでいることが何とどのように関連しているのかに学生自らが気づくような仕掛けが凝らされており、硬軟取り混ぜた多岐にわたる話題を引き合いに出しながら、発展的な学習に向けた展望を持たせようとする意図が常に込められていました。私はそうした授業を通じて、周到な準備をして授業に臨むという、教える側の最も基本的な姿勢を学ぶことができたと考えています。今は日々、生徒の既知と未知をどのようにして繋ぐかを念頭におきながら、授業の展開について頭を悩ませています。

3年生の終わり頃、あるお願いがあって川嶋先生の研究室に伺いました。その年、私は平河内健治先生のゼミ生でした。翌年の4年生でも、その年に初めてゼミを開講する予定の大石正幸先生のゼミを受講したい旨をお伝えしました。その上で、卒業論文を書きたいと思っており、つきましては川嶋先生に指導していただけないでしょうか、とお願いにあがったのでした。ゼミ生ではない私の卒論を指導していただきたいというのは、今考えてみると(勿論、当時もそう思っておりましたが)、大変身勝手に虫のいいお願いであったはずです。それにもかかわらず快く引き受けてくださった川嶋先生には、

当時も今も感謝の気持ちしかありません。卒論の指導を仰いでいながらゼミ生ではないということに、当初は申し訳ない気持ちを少なからず抱えていました。しかし、川嶋先生は年度が明けるとすぐに決まった時間を設定してくださり、その時間には必ず研究室に顔を出すようにとおっしゃってくださいました。基本論文がなかなか読み進められないとか、卒論の構成はどのようにしたらいいのかといった段階から丁寧に話を聞いてくださり、その都度、的確な助言をしていただきました。Lieberman and Prince (1977) が提唱した韻律理論についての論文を何とか書き上げることができたのは、川嶋先生が時間を割いていつでも親身に対応してくださったからでした。高校で、文法学習の添削指導や英作文の個別指導などをする場合にできるだけ丁寧に時間をかけて対応するということがあたり前に思っているのは、川嶋先生にこのような指導を受けたからだと考えています。

ゼミは3年生の時には平河内健治先生に、4年生では大石正幸先生にそれぞれ指導していただきました。高校の時に月刊『言語』を読んで興味を持った生成文法でしたが、実際にこの学問を本格的に学ぶことができ、それによって英語という言語についての、ひいてはことば全般についての興味が以前にも増して強くなったのは、お二人のゼミ生となったことが最も大きな要因であったと思います。平河内ゼミでは *Current Issues in Linguistic Theory* 等の論文をゼミ生が分担して発表しながら、文法理論で取り上げられる諸問題についての基本的な理解を深めました。平河内先生には大学院の修士課程に進んでからも2年間、指導教授としてお世話していただきました。大石ゼミにおいても *Linguistic Inquiry* などに掲載された論文をやはり分担して読むことで、当時の言語学における最先端の議論を垣間見ることができました。最も印象深かったのは、コピーにコピーを重ねたためか文字の判読が難しくなるほどに潰れた箇所のある、当時まだ出版前だった *Barriers* の原稿を“解読”しながら読んだことでした。最新の知見に触れているという知的興奮を感じながら熟読玩味した時間は、何事にも代えがたいものでした。英語という言語につ

いての理解を多少なりとも深めることができたとすれば、それはお二人の先生のゼミで鍛えていただいたからにはほかならないのです。

学部時代から修士課程修了まで、長谷川松治先生にも大変お世話になりました。大学院では、正規の講座でもラテン語の読書会でも予習が全く追いつかず、当時は気の遠くなる思いでしたが、それでも長谷川先生は折に触れて目をかけてくださいました。ある時、関西方面で開かれた学会に行った帰りにお土産を持ってご自宅に伺い、「名古屋のいろいろです。お口に合うといいのですが…」と言ってお渡しすると、「名物にうまいものなしと言うんだよ。いや、悪いね。」とおっしゃって受け取ってくださいました。その後は学会に行く时必须、出来るだけうまそうなその土地の名物を調達しては、玄関先で短時間、学会の報告をしに足を運ぶようになりました。院生としては甚だ出来なかった私は、修士課程修了に際して長谷川先生に手紙を書き、それまでのご指導に感謝していること、そして教員という立場になるからこそ学ぶ姿勢は持ち続けたいということをお伝えしました。今、生徒の前で勉強しない理由はいくらでも見つけることができると話をする時、それはそのまま私自身に向けた言葉となり、あの時の初心を再確認するのです。

### 3. おわりに

今振り返って改めて強く思うのは、東北学院大学は学びの場であり、出会いの場であったということです。在学中は多くの先生方にひとかたならぬお世話になりました。しかし、それは直接的に講義等で指導してくださった先生方とは限りません。実際、授業という接点が全くなかった先生方からもよく励ましていただきましたし、研究室でお話ししたり食事に行ったりしたことも思い出深いものがあります。初めて英文研に伺った時には名前で声をかけてもらい、驚いたこともありました。そうした場における何気ない会話の中から、有形無形の影響がなかったとは決して思えないからです。

私が東北学院大学という場で学んだことを発信することによって、生徒た

ちの英語の理解が少しでも深まり、ことばに興味を持ってくれれば幸いなことです。そしてもし、彼らの中に学び続けたいという思いが生まれたならばこれほど嬉しいことはないと思いながら、高校生たちと接しています。教員生活は現在の元号と同じ長さですので、年々、生徒たちとの年齢的な差は広がる一方です。しかし、知的好奇心という面では彼らと常に同じ土俵に立っていたい。定年が遠い先のことでなくなりつつある現在、このような思いで生徒たちと接しています。